

## 手 賀 沼 通 信 (第332号)

Eメール：nittay@jcom.home.ne.jp  
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/  
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

先月に続いて弟のエッセイです。  
弟は抗がん剤で治療中です。

### 「私の思い出の日々」 ひろこへのオマージュ ユ 新田自然

思い出に  
殺されながら  
生きて行く  
君といた日々は  
輝くナイフだ

この、わたしの、五行歌、いま、あなたたちのことを思い出しながら、反芻しています。  
わたしが、いまいるところは、湘南中央病院の8階にある緩和ケア病棟。  
わたしががんは、もう全身に転移しているようだ。痛みは間欠的にやってくるけれど、麻酔薬は、その苦痛から解放してくれ、しばらくは、あなたたちといた時間に戻れるのです。  
二十四時間、部屋は解放され、だれでも自由に入ることができ、窓からは、江の島や、丹沢の山々が見える。  
そう、あなたたちだって、入って来られるのよ。新しくなった辻堂の駅前も見える。  
駅前の雑踏の音さえ聞こえてくるような気がして…  
ねえ、窓の外はもう春かしら。  
まもなく、わたしのいのちは尽きる、一切の治療をお断りしてここに来た。  
死ぬときは誰もひとり、もう淋しいとは思わない。ひょっとまたいで、小さな溝を渡るように行ける世界。  
80年以上も、生きて来たけれど、ほんと、人生って一瞬なのよね。  
そしてバニー、間もなく、あなたのそばに参ります。  
わたしは尊厳死協会の会員、会員ナンバー 00

018172

バニー あなたのことを思い出しています。  
わたしにとって、かけがえのない、わたしが最も愛した人。  
そして許しもなく、風のように、わたしのそばを離れていった人。  
あなたは、わたしのジェームズ・ボンド。  
横須賀での、とある試写会、そのあとのパーティ、あなたは突然、わたしの前に現れた。  
わたしには初めての外国人。  
ジャケットとジーンズのよく似合う、ウインクとウイットの素敵な人だった。  
わたし達、バツイチ同士だったけれど、恋におちるのには時間はかからなかった。  
わたしにはあなたしか見えなくなって、  
そして結婚、  
あなたと生きた10年間、あなたがそこにいる、それで十分だった。  
横浜の街、  
バンコクの街、  
それらは夢のように過ぎ去った至福の時。  
あなたはアメリカ陸軍調達局の顧問弁護士、  
若いころ、まだあった徴兵制のもと、2年間の兵役につき、朝鮮戦争にも生き残り、弁護士の資格を取ったのだと。  
だけど、どんな仕事をしているのか、わたしはほとんど知らなかった。  
訊かないことが、わたし達の暗黙の了解事項。  
だけど、あなたとの会話は楽しく、いろんなことを聞かせてもらった。  
あなたの家族、育った町、食べ物、友達、映画、釣り、そしてカクテルと楽しいジョーク。  
1969年、あなたの都合で、わたし達はタイランドに生活に移した。  
タイ。合掌と含羞の笑みの国、香りのよい美しい花飾りの国、好奇心に満ちた高揚した日々。暑かったけれど、風の通る広い家、メイドさんがいた

が、あなたのことはわたしの仕事。  
そんなある日、突然あなたは言った。  
「ひろこ、明日ラオスに行かねばならない」と。  
ベトナム戦争はまだ終わってはいなかった。  
戦場に近い国、覚悟はしていたこと、旅の準備を手伝いながら、でも少し変…、  
あなたはパスポート、IDカード、身分を証明するものは全部デスクにしまったまま。  
「ねー、なんで持って行かないの？逃亡者？それとも007？」って聴いてしまった。  
あなたはニヤリと笑って  
「ごめん、今はノーコメント、だけど、どんなことがあっても、君と一緒にになって本当によかった、君のすべてが好きだけれど、なによりそのウィットとユーモアだね、一生君には飽きないと思う、それで、ダブルオーセブンのおみやげはダイヤモンドがお望み？」  
「ダイヤはいらない、あなたさえいればいいの、必ず戻ってくると約束して」  
「かならず…、戻ってきます」  
あなたは笑顔で答えてけれど、わたしは不安だった。  
そして、翌日の朝、あなたは声掛けもせず、ふっと消えて…。  
待ち続けた日々「アノヤロウ、どこ行っちまったのだろう」  
だけど、戻ってくることになんとか確信していた。いや確信しようとしていたのかもしれない。  
夜は、とくに淋しい、全く無音の世界、闇が怖かった。  
夢を見た、ハニーがジャングルの中に迷い込み、沼地に足をとられ「ハニー、助けてくれ」  
無限の闇の中でわたしも、もがいていた。  
そんな夜が続いた。

そして、ある晴れた日…、がたがたって音がして、乱暴にドアが開かれた。  
「タダイマー」と満面の笑み。  
わたしは無言であなたの胸に飛び込んで、思いっきりあなたの熱い胸板を叩いた。伸びたアゴヒゲがチクチクした。あなたの唇をむさぼった。抱き合ったまま、しばらくそのまま離れなかった。  
そのあと、二人は安心して少し眠った。  
おみやげは、すてきな金のブレスレットだった。  
「ラオスはね、ダイヤモンドは産出しないんだよ」

だって。  
そんなことが三度ばかり。  
タイでは軍事クーデターなど、いろんなことがあったけど、それらも無事乗り切った。  
ベトナム戦争が終わって、帰国して、あなたの仕事を訊いた。  
「ねえ、わたしのジェームズ、あなたのミッションで、なんだったの？」  
「ボンドのようにかっこよくなかったけどさ」と照れたように…、  
それは「国境なき医師団」のメンバーとして、病院を立ち上げることであった。  
あなたは、生命の危険さえ冒して、任務を全うし、戻ってきた。  
わたしの描いていた、平和の戦士、あなたは私の誇りでした。

なのにどうして？

1980年、12月も押し詰まった日、にぎやかなクリスマスパーティーも終わって、あなたはお友達と裏磐梯へ旅立った。  
新調したスキーを手にして、子供みたいに、はしゃいで、  
「ヒロコ、一緒に行こう」と何度もわたしを誘った。  
なぜ、わたしは同行しなかったのだろう。  
……その日、わたしはお正月を迎える準備に追われていた。  
バニーが戻ってきたら、お友達にいっぱい日本のお正月の料理をふるまおう。

そんな夜、突然の電話、「ヒロコ、バニーに事故があったらしいの、すぐに電話して」  
友達の奥さんからの電話は切迫した声だった。  
「やーねえ、お正月はギブスかしら」とホテルにいる仲間に電話した。  
「もしもし、バニーはどこを骨折ったの？ ももしもし」  
「・・・ヒロコ、しっかり聞いてね、きょう12時35分にバニーは呼吸停止しました」  
「・・・」  
バニー、突如わたしの脳の回路は切断されました。その後のことは覚えていません。  
そしてあなたは、美しい顔で戻ってきた。

死亡診断書、〈急性心不全、発病から数分後死亡、享年47歳〉

こんな紙切れは何の意味も、もたなかった。裏磐梯であなたは突如、雪女にさらわれてしまったのです。今でも信じられないこと。

いつかのように『ただいまー』って、あなたはウインクしながら戻ってくるはずだと。

あなたの不条理な消え方に怒りさえ覚えました。

眠れない夜が続いたわ。

そんな夜は長かった。ただただ、あなたがほしかった。あなたの笑顔、わたしを抱き寄せる力強い強い腕、むつみあう唇、そしてあなたの重さも…。

もう、この国を捨てようと思った。現実を受け入れることができず、やみくもに旅をしたこともあった。キリマンジャロの雪や、イグアスの滝、パタゴニアの氷河、ある時はタイムズスクエアの喧騒の中。すべてバニーの遺産。

だが、旅も、ジャズも、ワインのがぶ飲みも、なにもわたしを満たしてはくれなかった。

それから数年後、

日本からの空路32時間、篠突く雨のブエノスアイレス、地球の裏側の国。

空港のデッキには裕二のはにかんだような笑顔がわたしを待っていた。

ーわたしを待っているひとがいる、すごくうれしい。

ふしぎな出会い、

繁華街から少し離れた、小さな喫茶店、

「もしかして日本の方…？」話しかけてきたのは裕二だった。

あの先の見えないトンネルのなかで、光をさしこんでくれたのが裕二、

すがりついたのはわたしのほうだった。

なにもかも捨ててここで暮らそう。実現不可能な決断は私が言い出したこと。

ゆったりとした　ラ・プラタ川、緑深い街並み、タンゴ「カミニート」、バンドネオン、深紅のワイン、そしてエビータのいた街。

ひっそりと地球の裏側にいる安心と、あの日を忘れさせてくれる癒しの時間。

裕二の若さは美しく、無邪気で、無類の器用さ、そしてとても優しくかった。

見つめているだけで一日が終わり、彼のたてるか

すかな寝息が夜を優しくしてくれた。

バニーに「私にはこれしか生きるすべがないの」と言い訳をしながら…。

だけど、出会った時から感じていたかすかな不安。バニーとの切り裂かれた時間を、無意識に裕二に求める自分の愚かしさが、不安の原因だとは気づいていたのに、孤独に戻る恐ろしさに、日々を重ねていた。

古いタンゴのひとつに

「人生なんて、どうしようもない傷口みたいなもの」という一節がある。

それがだんだん大きくなってしまったのは、わずか9ヶ月。

どこから見ても、無理で不自然な同棲。

この地を襲った猛烈なインフレも、しっかりと根を張っていないわたしたちに襲いかかった。そして彼に匂うかすかな女の香り。

別れ、それは私が決めねばならない。

もう、私には修羅場を演じる気力はなかった。

「裕二、いまでも、とても好きよ、だけど、君もわたしも自由になるべきと思うの、タンゴをたくさん聴かせてくれてありがとう」

レコンキスタ通りの小さなアパート、レター紙にそれだけ書いて、私はコートの襟を立て、そっと家を出た。

「さようなら裕二、さようならきのうまでのわたし」

ミニストロ・ピスタリーニ国際空港は霧のなかだった。

♪「don't cry for me Argentina」

その頃はやり始めたミュージカル「エビータ」の一節。

飛行機は霧のなかを飛び立った。

時間はいろいろなものを薄め、流してくれる。

わたしは一人で生きて行けるようになっていた。

以前勤めていた映画会社の宣伝部、もとの仲間が救ってくれた。

わたしはこの仕事が好きだった。適当に好奇心を刺激してくれ、適当に忙しく、過去から解放してくれる。

「華麗なるギャツビー」「ゴッドファーザー」「スティング」など…、あの頃の映画はわたしを夢中にしてくれた。

とある日の葉山、

わたしは友人の開いてくれたパーティのなかにいた。美容師、絵描き、雑誌記者、写真家、ファッション関係者など、おしゃれで、開放的、話題はあちこちに飛び、みんな自由で若い。

なんともいえぬ喧噪、

そのなかで、年上の女は不似合い、あたらしい話題について行けず、わたしは帰るきっかけを探していた。

「do you like a gin and tonic？」

それがジョナサン・カーターだった。ツイードのスーツだったが、横須賀の現役ネービー・キャプテン、

その一言が、場違いで沈みかかっていたわたしを救ってくれた。

彼の日本語はたどたどしく、少しばかりの英語しか話せないわたしといい勝負、

ふたりはたちまち意気投合していた。

ジョナサンも話題が豊富で、バンニーそっくり、わたしは彼のことを「カモメのジョナサン」と呼んだ。カモメのジョナサンは、ジョークとウイットに時間を忘れさせてくれた。

夏も終わりのころ、ジョナサンはわたしをセーリングに誘ってくれた。

横須賀の米軍基地内、彼の操る帆船は、想像していたのよりはずっと大きかった。

「クルーの皆さんは？」

「キャプテンとワンクルー」

「本気？このクルーはクルールになる自信はないけど」

楽しいわたしのジョーク、久しぶりに心から笑った。

ジョナサンは、ヨットの扱い方を教えてくれた。

「ヘーイ、ヒロコ、ジブを右」「アイアイ、サー」彼は背中から腕を回して、わたしを抱くように舵の取り方を教えてくれた。

船首が切る浪の音、風をうまくとらえたセールは、軽くハミングする。

東京湾までの遠出、折よく出会った「にっぽん丸」との並走、白いセーラー服が手を振ってくれる。心地よい揺れに身を任せる。

猿島に係留、日に焼けた肌に快い風、そして赤いワイン、夕日がふたりを赤く染める。

彼はわたしをやさしく抱きしめ、ふたりは思わずキスを交わしていた。

ゆるみかけたセールがピンと張った。

帰途、ほてった体で車を走らせながら、バンニーに話しかけた。

「ほんの少しだけど、あなたから目をそらしていい？」

「オーケー、ヒロコ、今を楽しんで」

ぜーんぶ、わたしの一人芝居、

だけど、どこからか、「ぼくのことを忘れてしまわないで」という声を聞いたような、気がした。

秋が駆け足で過ぎ、十二月になって、ジョナサンは、わたしをネービーホールに誘ってくれた。

海軍のオフィシャルなパーティ、

「クリスマスと一緒に過ごしてほしい、ヒロコをみんなに紹介する」と。

「できれば君と...、」

「待って」

わたしは彼の電話を遮ってしまった。

12月は、バンニーが去ってしまった月、わたしにはもう一度新しい生活にチャレンジする勇気がなかった。

わたしは、彼の申し出を断ってしまった。

「さようなら、Jonathan Livingston Seagull」

カモメのジョナサンは、静かに飛立ってしまった。

振り返ることさえ、いやだったけれど、いまはそれらに包まれて、ふわーっとしています。

間もなくわたしの人生は閉じられる。

過去と、現在と、未来、それらが一点に凝縮するときが死ぬとき、なんですね。

空の色が変わって、窓の外はもう夕暮れの気配。あなたたちにお付き合いして、少し疲れたようです。

バンニー、裕二、そしてジョナサン、ちょっと休むね...

ひろこさん、文芸光風の原稿を整理していて、偶然、あなたの五行歌に出会いました。それであなたの作品を読み返しました。あなたは文芸光風の会員として、4年間、8冊にわたって、じつに丹念に過去を見つめ、書きとめられています。

そして2014年、あなたは見事に、あなたの人生を演じられました。あなたの人生に喝采を送り、あなたのお話や、イメージを、私なりに膨らませて、書かせていただきました。あなたへのオマージュとして...